

平野日出征先生追悼号に寄せて

著者	千種 眞一
雑誌名	東北大学言語学論集
号	11
発行年	2002-09-27
URL	http://hdl.handle.net/10097/00129646

平野日出征先生追悼号に寄せて

東北大学大学院文学研究科言語学講座教授平野日出征先生は、平成13年12月6日、卒然と浄土へ旅立たれた。それから早くも半年余の月日が流れた。残された私たちは此岸に慌ただしい日々を送りながら、先生のいらっしゃらない研究室周辺に、かつての先生のエネルギーな言動をしばし追懐することも一再でなかった。最適性理論を適用して先生が精魂を傾けられた『韓国語音韻の研究』は、大学院時代以来一貫して探求されてきた韓国語音韻論のあたかも集大成のごとく、生前にその完成を目にすることのない遺著となってしまった。いや、なによりも、言語学者としてこれから本格的に熟成されようとする時期を前に逝かれたことは、先生ご自身無念の極みであったに相違ない。

先生は一度社会人として世に出られてから、言語学を志して東北大学へ入学されただけあって、周知のように、この学問に対する熱意には並々ならぬものがあつた。当時の言語学研究室は英語学研究室と関係が深く、生成文法を学ぶ多くの学生たちとの刺激に富んだ交流も盛んであつたが、先生は、人気のあつた統語論ではなく音韻論への道を迷いなく選ばれていた。いつも座右に Chomsky and Halle の *The Sound Pattern of English* を置かれて頁を繰られていたことを思い出す。しかし、先生の興味はひとり音韻論にとどまらず言語学のさまざまな分野に向けられていた。ことあるごとに安い酒を酌み交わしながら、種々議論をする中で先生の鋭い指摘に再三たじたとさせられたことなど懐かしい。新潟と旭川の地で教鞭を執られたのち東北大学文学部言語交流学講座へ着任されてからも、こうした先生の熱誠あふれる批判精神は、ご自身の研究のみならず学生の指導にも大いに発揮された。研究室は遅くまで明かりがともり、それぞれ学生のテーマに応じてきめこまかに話をされていた姿は日常的にあつた。人一倍の寂しがりやでもいらした先生は、研究と教育に粉骨砕身されることで、最愛の奥様に先立たれた悲しみに立ち向かおうとされていたのではなかろうか。

このたび、先生に直接間接に薫陶を受けた多くの教え子や後輩の方々が、日頃の研鑽の成果を追悼号にお寄せくださった。先生はこの『東北大学言語学論集』の定期刊行に力を注がれ、自らも論文を精力的に投稿されていたゆえに、深甚の謝意をこめて本『論集』を先生への追悼号とさせていただくこととした。先生は「そんなこと、してくれなくたっていいよ」とはにかみながらおっしゃりそうな気がするのだが、かつて親交を結ばれていた方々に生前の先生を偲び、永く記憶にとどめるよすがとしていただけるならば、言語学研究室を衷心より愛された先生に対してこれを凌駕する恩返しはないと信ずる。

釈博慈 平野日出征先生、遙けき浄土にて奥様とともに安らかに。合掌。

平成14年7月

東北大学大学院文学研究科言語学講座

千 種 眞 一